境町歴史民俗資料館だより

河岸町の歴史

2022.12　Vol.17

古河公方の城館長井戸城と戦国時代の境町

長井戸城址（境町歴史民俗資料館）

境町の長井戸地区に鎮座する香取神社の境内を中心にした地域には、南北朝時代から室町時代に古河公方の城郭として築城され、戦国時代（天文年間期）菅谷左京の居城として栄えていた長井戸城址があります。同じく長井戸地区には長井戸城址の南西四〇〇メートル地点に長井戸城の出城的な機能を持った田向（たむかい）の城、三方を長井戸沼に囲まれた天然の要害として熊野神社が鎮座する稲尾地区には稲尾加賀守（かがみのかみ）の居城として栄えた稲尾城が築かれていました。

現在、香取神社の社殿がある長井戸城址周辺には、二重の横矢土塁や横矢空堀（水濠）がはっきりと残っています。また、香取神社西方の長井戸沼縁の「りょ

「下総境の生活史　図説・境の歴史」

うがえ堀」の北には長井戸城の物見台がありました。

長井戸城の起源は、二度にわたる遺跡調査によって発掘することができた屋形建築の柱穴や遺物などから、鎌倉時代に鎌倉武士として仕えていた在地豪族の館と推定されています。

江戸時代に編纂された戦国時代の猿島郡地域の様相を伝える「東国闘戦見聞私記」には、戦国時代の天文二三年（一五五四）年に長井戸城主菅谷左京が、下野国の小山朝政軍の攻撃を受け、激戦の末、隣の稲尾城主稲尾加賀守とともに降伏していたことが記されています。

その後、安土桃山時代になると、菅谷左京は同じ長井戸の豪族相良（さがら）氏とともに、豊臣秀吉の朝鮮侵略による文禄・慶長の役に従軍し、ついで、徳川家康によって豊臣家が滅亡した大坂の役（冬・夏の陣）に参戦した後、在地の長井戸に戻って農民になっています。

長井戸城内配置図　「下総境の生活史　図説・境の歴史」

ところで、中世（鎌倉～室町時代）の城郭としての長井戸城の発掘は、中世の猿島郡の歴史を語ることができる貴重な城館遺跡になっています。長井戸城の遺跡調査は、日本城郭史研究の第一人者である西谷恭弘先生を中心にすすめられ、予備調査を含め、昭和五八年（一九八三）、昭和五九年（一九八四年）に本格的な遺跡調査が実施され、長井戸城の全容が解明されたのです。

しかしながら、長井戸城が茨城県下であまり例をみない城館遺跡で他の城館址の遺構や遺物との比較ができなかったことから、歴史的な位置づけをすることが困難でした。さいわい、長井戸城が所在する境町で、昭和五六年（一九八三）から、明治大学の木村礎教授を団長とした近世の村落調査が実施されたことが大いに参考になったようです。

長井戸城主 菅谷左京公
「さかいの歴史ものがたり」

長井戸城の遺跡調査は三ヵ年を要し、この調査と並行して境町に隣接している地域の古河城（古河市）や逆井城（坂東市）などの遺跡調査も実施できたことで、中世及び戦国時代の城館址の状況を把握することができました。

ところで、長井戸城とその周辺地域は、鬼怒川の氾濫原がもたらした関東平野中心部の湖沼と微高台地のために陸路と分断している地域でした。鎌倉～室町時代は、下野国（栃木県）の豪族小山氏に代表される北関東勢力と鎌倉府との接点になっており、戦国時代は、古河公方、後北条氏と北関東の国人や在地領主の勢力争いの境目になっていました。こうした背景から、長井戸城は、戦国時代の城郭として、関宿城や栗橋城、古河城や逆井城など、周辺地域の諸城と深い関係があったと考えられます。

また、境町の長井戸城とその周辺地域には、河川と長井戸沼など南北に細長い湖沼が存在し、江戸時代初

期に開始された利根川東遷以前は、陸路と反対に水路は江戸湾に流れて物質と人的交流の動脈になっていました。したがって、長井戸城が築城された背景が長井戸沼に続く太日川（江戸川）、古利根川と深い関わりがあったと考えることができます。

安土桃山時代の長井戸城とその周辺地域は、領内への侵略という軍事的な緊張が異常に高まっていた時期でもあり、その対策として城砦の大改修が行われていたことが発掘調査によって判明しています。

また、同じ頃、長井戸城南方の田向の地に防衛線としての田向の城（出城）が築城されています。戦国大名の築城工事は、夫役（税制の一般労役）の一環として、軍事的な緊張が高まっている地域で次々と着手されています。

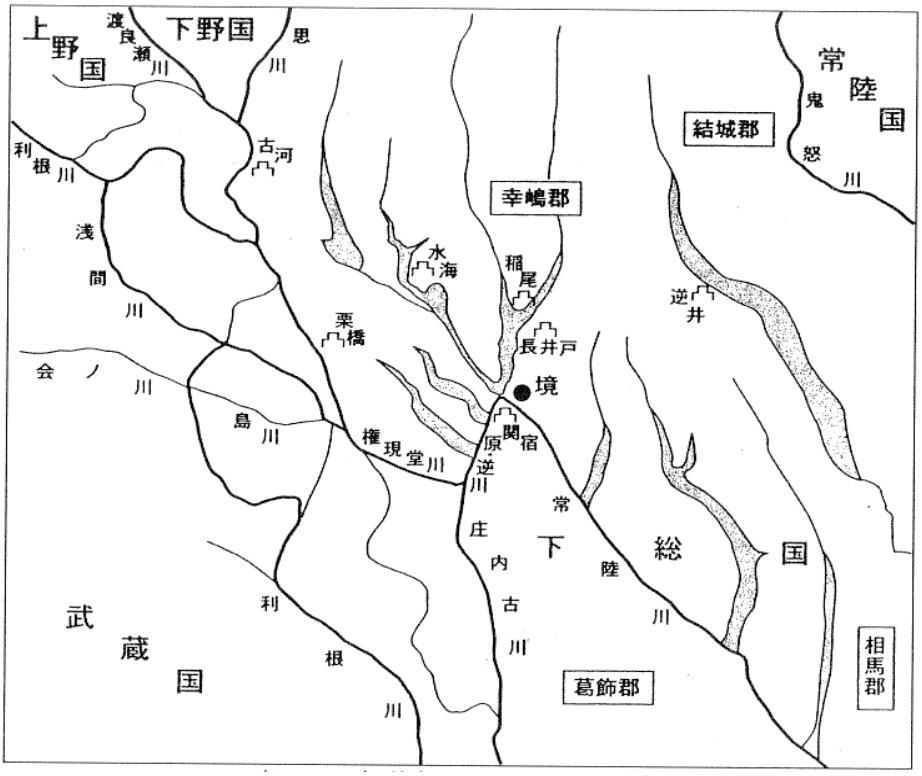
伝承では、長井戸城は長井戸地区の中央の最も高い地域に位置し、集落の開発とは異なる目的で築城されていたと考えられています。その後、字中屋敷南の字元香取から香取神社が長井戸城址に移転され、やがて、神社を中心に村人が集住し、一七世紀になると、江戸時代の村落として長井戸村が開けていったと伝えられています。

長井戸城址に残る土塁
（境町歴史民俗資料館）

長井戸城周辺の城館遺跡

長井戸城を取り囲む歴史的環境を城郭史の立場で見ると、長井戸城周辺にあった城館には、境町内で、長井戸沼を隔て北に約九〇〇メートルの熊野神社が鎮座する地に、戦国時代の稲尾加賀守の城館と伝えられる稲尾城、長井戸城から南西に約五〇〇メートルの地に、地元で「長井戸の殿様の居所」と伝えられる田向城があり、長さ約一〇〇メートルの土塁と櫓台、空堀が残っています。また、長井戸城より南東に約六キロメートル離れた若林地区のほぼ中央に位置し、現在は高台になっている字「館の前」には古河公方の家臣堀江侯の館と伝えられる城館址があり、土塁が残っています。

境町の周辺地域に築かれた城館には、旧古河市に、古河公方の本拠で後に後北条氏（小田原北条氏）の有力支城となった古河城と鴻巣館、旧総和町には、小堤城（現在は円満寺、古河公方家臣諏訪三河守の居城）、水海城（水海小学校敷地、簗田氏の本城）、磯部城（簗田氏の持城）、柳橋城（古河公方の家臣柳橋豊前の居城）、旧三和町に山田城と諸川城（古河公方家臣の椎路信濃守の居城）が築かれています。



中世末の幸嶋（猿島）郡の周辺図
「町史研究　下総さかい　第７号」

また、坂東市（旧猿島町・岩井市）には、飯沼周辺に古河公方の御料所（直轄領）として逆井城、駒寄城、弓田城が築かれ、旧利根川流路の五霞町には、権現堂城と築田氏が築城した山王山城、利根川を挟んだ千葉県・埼玉県には、北条氏康の子氏照（当主北条氏政の弟）の居城栗橋城（埼玉県久喜市）、古河公方と築田氏の居城となっていた関宿城（千葉県野田市）があります。

室町時代には長井戸城とその周辺の城館は古河公方の御料所になり、その後、後北条氏支配地の城館となっています。

また、初代古河公方の足利成氏が、鎌倉から古河の地に本拠を移した理由は、古河の地が関東の中央の沃野（肥沃な地域）を掌握するうえで最適な地勢にあり、結城氏に代表される在地領主が控えていたからです。古河公方の御料所は飯沼と太日川に挟まれた地に集中し、飯沼を境として多賀谷氏と山川氏の領国になっていました。

中世の関東平野と利根川の流路

中世の利根川は、上野国（群馬県）の山間部から東南に流れており、その下流は二つに分かれていました。その一つは関宿を中心とした太日川（江戸川）と呼ばれる流路を本流として、下野国を流れる思川や渡良瀬川などの水流を集め、下総国（千葉県）の市川を経て、行徳付近で江戸湾に注いでいました。そして、もう一つは、古利根川です。古利根川は、武蔵国と下総国の国境を大河によって形づくっていました。こうした太日川（江戸川）と古利根川に挟まれた地域が中世の下河辺荘でもあり、鎌倉公方、さらには古河公方の御料所になっていた地域でした。また、太日川と古利根川は、広大な関東平野を分断する天然の流れの二重の濠でもありました。

近世初期に太日川は江戸川になり、古利根川は、荒川と合流して隅田川として据え換えられました。また、利根川が今日の流路の原型となったのは、承応三年（一六五四）のことで、それ以前は銚子に注いでいませんでした。ここで、特に重要なことは、五霞町川妻付近から、関宿に直線的に通る現在の流路は、元和七年（一六二一）に開削工事が始められ、承応三年（一六五四）に通水したもので、中世にはこの流路は存在していなかったのです。それ以前は現在の権現堂川が利根川の本流になっていました。なお、権現堂川の東岸には関東の覇者北条家の北条氏照の居城となった栗橋城があって、北条氏照が関東の勢力拡大を図るために、古河―栗橋―関宿に至る中世の利根川水運を重要視したことを示しています。

（境町歴史民俗資料館　野村正昭）